

## ▶ ディザスタリカバリの何が問題なのか

昔、イングランドのクヌート 1 世は、玉座を海岸線に持って行くと、腰を降ろし、潮にそれ以上満ちるのを止めるように命令したことがありました。

データ量の増大を食い止めようとする試みも、無駄という点では同じような教訓が得られます。

世界のデータ量は現在、4.4 ZB<sup>1</sup> を超えており、近い将来、その勢いが衰える見込みはありません。

より優れたディザスタリカバリ (DR) 戦略のためには、この不可避な流れを

食い止めようとするのではなく、増加するデータを確実に保護することこそが重要になります。

残念なことに、データ量の増大という潮の流れに対して、

ほとんどの企業の DR 戦略は企業を守るのに十分ではありません。

重大な故障または自然災害が一度でも起これば、組織の存続が危機にさらされます。

それでは、DR の何が問題なのでしょう。7 つの理由について説明します。



## 1: 自動化の欠如

自動化されているはずの組織においても、突然生じる多くの問題点に対処するために、バックアップの管理や操作にだれかが時間を費やさなければならぬのが一般的です。これらの問題に対処するため、スクリプトの作成、トラブルシューティング、および繰り返しのバックアップが、日常業務の一部になっています。要するに、手動のプロセスが原因で、組織が危険にさらされます。

## 2: テープの使用

最初のステップは、いまずぐテープの使用をやめることです。日々変化する IT の速いペースからすると、あまりに非効率的であり、パフォーマンスも十分ではありません。最新の DR インフラストラクチャには、テープの居場所はありません。

## 3: 冗長データ

毎年 20 ~ 50% のペースで増え続けるデータ量に対処するのは確かに重要ですが、バックアップ データ セット内の冗長なデータを許容し、問題を複雑にする必要はまったくありません。冗長なデータはコントロールすべきです。

## 4: ネットワークのボトルネック

クラウドのみのバックアップと DR があれば準備万端と思えるかもしれませんが。しかし、単純に物理的な問題について考えてみてください。帯域で許容できるのが 100 Mb/ 秒または 1 Gb/ 秒であり、企業がリカバリする必要があるのが 100 TB であるなら、その転送には非常に多くの時間を要してしまいます。リカバリ プロセスが完了するまで何日もかかる可能性があります。今日の企業は、データの受信に何日も何週間も待てるほど暇ではありません。リカバリが完了する前に、倒産してしまいます。

## 5: 非仮想化ストレージ

現在、約 70% のサーバーが仮想化されており、この数は急速に増え続けています。ところが、ストレージがそれに追いついておらず、サイロ化が生じており、ストレージ管理を困難にしています。これらは、日々の業務に悪影響を及ぼします。そればかりか、いったん重大なデータの消失が発生すると、DR の悪夢が始まるのです。あらゆるものを一度にリカバリするのではなく、IT 部門は一度に 1 つのシステムや 1 つのデータベースをゆっくりと慎重に復旧する必要があります。

## 6: すべての道は IT に通じる

上司が重要なファイルを間違えて削除または紛失したときなど、あまりにも多くの企業で、データ消失事故が起こるたびに、IT 部門を呼び出す必要があります。この状況は、モビリティ、仮想的な仕事環境、および私物デバイスの業務使用 (BYOD) ポリシーの増加に照らしてみると、さらに顕著になっています。こうしたオペレーション形態は、時代遅れであり、非常に非効率的です。

IDC Whitepaper:Leveraging the Public Cloud for Faster Disaster Recovery at Lower Cost<sup>1</sup>

クラウド コンピューティングを活用して、従来の方法よりも低価格で導入が簡単な DR 機能を開発する方法についてご覧ください。

今すぐ読む



## 7: ポイント ツールの蔓延

かつては、ポイント ツールにもそれなりにふさわしい場所がありました。しかし、それはもはや過去のことです。複雑になってくると、災害、データ損失事故、停電からのスムーズなリカバリを行うことはできません。

### ▶ DR の巻き返し

このような後手に回った DR から巻き返す唯一の方法は、DR に対する最新のアプローチを採用することです。つまり、互いに緊密に連携する独立した要素が 1 つの統合ソリューションを構成するアプローチです。これらの要素には、次のものがあります。

- 労力のかかるタスクをなくし、バックアップの失敗を回避するためのバックアップの自動化
- 主要なアプリケーションとシステムを即座にリカバリするためのスナップショットの正しい使用
- 基盤となるハードウェア インフラストラクチャからソフトウェアとアプリケーションを切り離すための仮想化技術とソフトウェアで制御されたストレージ (SDS) の導入
- 洞察をリアルタイムに提供するためのアナリティクス
- ユーザーに各種権限を付与するセルフサービス機能
- オンプレミス要素とクラウド要素で構成されるハイブリッド アーキテクチャ
- DR 操作の統一、一元化、およびシンプル化を行うための共通プラットフォーム

### ▶ リソース

[i commvault.com/resource-library/555d8b0d00e072a74700007f/idc-report-leveraging-the-public-cloud-for-faster-disaster-recovery-at-lower-cost.pdf%20](http://commvault.com/resource-library/555d8b0d00e072a74700007f/idc-report-leveraging-the-public-cloud-for-faster-disaster-recovery-at-lower-cost.pdf%20)

- ▶ Commvault ソフトウェアは、データと情報管理に真の包括的アプローチの比類なきメリットをもたらします。詳細については、[commvault.com/solutions](http://commvault.com/solutions) をご覧ください。

© 2017 Commvault Systems, Inc. All rights reserved. Commvault、Commvault とロゴ、「CV」のロゴ、Commvault Systems、Solving Forward、SIM、Singular Information Management、Simpana、Simpana OnePass、Commvault Galaxy、Unified Data Management、QiNetix、Quick Recovery、QR、CommNet、GridStor、Vault Tracker、InnerVault、QuickSnap、QSnap、Recovery Director、CommServe、CommCell、IntelliSnap、ROMS、Commvault Edge、および CommValue は、Commvault Systems, Inc. の商標または登録商標です。その他すべてのサードパーティのブランド、製品、サービス名、商標、または登録サービス マークは、それぞれの所有者の所有物であり、これらの所有者の製品またはサービスを識別するために使用されます。すべての記載は通知なしに変更される場合があります。

**COMMVault** 



- ▶ Commvault Systems Japan 株式会社 〒141-6008 東京都品川区大崎 2-1-1 ThinkPark Tower 8F

[www.commvault.com](http://www.commvault.com) | PHONE: 03-5747-9610 | [jpsales@commvault.com](mailto:jpsales@commvault.com)  
© 2017 Commvault Systems, Inc. All rights reserved.